

古代日本と朝鮮渡来文化（一）－高麗神社と聖天院をめぐって－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 任仲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13937

古代日本と朝鮮渡来文化（一）

——高麗神社と聖天院をめぐって——

金 任 仲

はじめに

埼玉県日高市にある高麗神社^①は、高句麗から日本に渡来した高句麗の王族若光^{じやうこう}を祀る神社として知られている。高麗神社へ至るには、東京の池袋駅から出る西武池袋線に乗り、所沢・飯能を経て走ること約一時間、「高麗駅」で下車し、徒歩約四〇分位かかる。また新宿駅から出る西武新宿線に乗り、JR川越線で川越を経て一時間位走ると、八高線・川越線の「高麗川駅」があり、ここで下車して徒歩約二〇分あまり行くのも便利である。西武池袋線の高麗駅前に降り立つと、まず目に入るのは

道の両側に立っている「天下大將軍」^{チヨンハデヂギンジン}「地下女將軍」^{ヂハニヨヂヤンジン}という異様な標柱である。これは、韓国の村でよく見られるチャンスン・將軍標というもので、村の境界を表わすと同時にその村の厄災防除を願う守護神・道祖神でもある。その高麗神社から南西方向に徒歩五分ほどのところに、高麗王若光の菩提寺として建立された「聖天院^{いん}」という寺がある。

高麗王若光が日本に渡来した年代について、社伝には伝わらないが、『日本書紀』天智天皇五年（六六六）十月の条に、高句麗から派遣された使節の中に「二位玄武若光^②」の名が見え、若光が来日したのは、天智天皇五年十月であると推定される。さらに『続日本紀』文武天皇

大宝三年（七〇三）四月の条に、「從五位下高麗若光に王の姓を賜ふ」と記されており、六六八年に高句麗が新羅と唐の連合軍によって滅亡されたことを勘案すると、

この若光はついに帰国せず、三〇〇年程の歳月が経って文武大宝三年、もともと高句麗王族出身の故もあって、大和朝廷から「王」という姓が与えられたと考えられる。

この高麗神社は、今も若光の子孫といわれる高麗家が代々宮司を務め、現宮司は六〇代目となっている。特に高麗神社が有名になったのは、一九一〇年八月、日本による強制的な「韓国併合条約」が締結されてからである。朝鮮植民地統治者たちは、高麗神社を朝鮮民族が日本に同化した一典型と見做し、朝鮮民族同化政策の方便として大々的に宣伝し、多くの人々を参拝させたわけである。実際、高麗神社の境内には、今も植民地政策と関わりがある建造物がいくつか存在しているということである。これは、日本による朝鮮植民地支配下において、高麗神社が政治的に利用されたことが分かる。

本稿では、日本における朝鮮渡来文化の一つである高麗神社と聖天院をめぐる、日韓両国の歴史的背景や、政治的・社会的影響などについて考察を試みたいと思う。

一 古代日本史と高麗（高句麗）人

古代朝鮮から渡来人が日本列島に住み着くようになるのは、高句麗からの高麗氏族が決してはじめてではない。四世紀から五世紀以降、朝鮮半島からいち早く来日した渡来人の多くは京・畿内やその近隣に抱擁され、高度な学術や技芸、さらに労働力を日本の上代文化の発展に寄与・提供し、彼らもまたその地域を安住の新生活の場としたのであった。しかし、時代はようやく律令体制が整備される七世紀以降になると、彼らは遠く離れた東海・東国へ配置されたのである。それは、当時の政治的形勢として彼らを母国から遠ざけて内応を避け、防諜を考慮して未開拓地だった東海・東国の開発に彼らの特技を利用したのであり、行政区域なども設けられたのである。

古代歴史学者上田正昭氏によると、朝鮮半島から膨大な数の渡来人は、次のように大きく四回にわたって日本にやってきたと推定されている。

(一) すでに紀元前三〇〇年ごろから、朝鮮半島を媒介とする大陸文化の波がこの国土にははっきりみ

られるようになり、かなりの人々がわが国へと移住してきた。考古学上における弥生時代の遺物や遺跡について見ても、東アジアの動向に連動した要素がある。

(二) 渡来のおねりがたかまるのは、五世紀前後（応神・仁徳期）の時期である。そのころには、畿内大和を拠点とする統一国家が形づくられていなかった。

(三) 五世紀後半から六世紀のはじめを中心とする時期である。雄略期から欽明朝へかけての時代がそれであって、渡来の波はいっそうたかまりをみせる。

(四) 渡来の波がさらに大きなうねりを示すのは、七世紀後半とくに天智朝の前後である。日本列島でも、壬申の乱のち統一国家が成立し、高句麗・百済からの亡命者がとても多かったと考えられる時期である。

ここで、注目したいのは朝鮮半島からの渡来人が一番多く日本に渡ってくるようになったのは、四回目ということである。七世紀の後半になると百済について高句麗

が新羅と唐の連合軍によって滅ぼされ、朝鮮半島南部から大量の亡命者の渡来が見られる時期である。それは『日本書紀』天智天皇七年十月の条に「大唐大將軍英公、高麗を打ち滅す」とあるように、天智七年（六六八）に高句麗が滅亡したことは、周知の通りである。その後、政治的な利害関係もあって、日本に亡命するものが多く、特に高句麗滅亡の二年前に日本に使わした使節の一員として来日した若光は王姓を賜うなど、普通の亡命者とは違っていたいへん優遇されていたことが分かる。

そして、大和朝廷は彼ら亡命者を日本各地に移住せしめ、『統日本紀』によれば、元正天皇靈龜二年（七一六）五月の条に、

辛卯、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷し、高麗郡を置く。

とあり、高句麗系の渡来人は古くからすでに東国に居住していたことが知られる。すなわち、この記事を見ると靈龜二年以前、すでに七国に高句麗人が渡来して居住しており、この年始めて高句麗系渡来人一七九人が武蔵

国に移住せしめられ、「高麗郡」が設置されたことは明らかである。武蔵国の高麗郡の設置は、高句麗が滅亡してから四八年後のことであり、「従五位下高麗若光」が王^{コキョウ}という姓を賜った文武大宝三年（七〇三）四月からは十三年目に当り、未開拓地の武蔵国に高麗郡を設け、そこに移そうとした一七九九人の首長に選ばれたのは、高麗王若光であっただろうと思う。この出来事は、祖国高句麗が滅ぼされ、大和政権を頼ってきた高句麗人たちは、若光らと共に未開拓地であった東国の開発のために容赦なく追いやられたものと見られる。

また、淳仁天皇天平宝字二年（七五八）八月の条に「帰化きし新羅の僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人を武蔵国の閑地に移す。是に始めて新羅郡を置く」と見え、ついで天平宝字四年（七六〇）四月の条に「帰化^{おもむ}ける新羅の一百卅一人を武蔵国に置く」とあるように、武蔵国の高麗郡について新羅郡を設置し、新羅系渡来人たちも東国開発のために移住せしめられたことが知られる。これら渡来人の東国地方への移住によって、農業・酪農・養蚕・機織などに古代朝鮮の先進技術を利用して同地の開拓が行われ、産業・文化などあらゆる面で大きな変化がもたらされたことは容易に考えられる。

ところが、今井啓一^①氏は、霊龜二年五月、相模など東国七国に居住していた高句麗人を武蔵国へ移した高麗郡を本郷とすべきであるが、「はじめ若光日本に投下するや一路、東海を指し遠江灘からさらに東して伊豆の海を過ぎり相模湾に入り大磯に上陸した」と伝える大磯の高麗神社の社伝によって、若光一団は先に相模湾の大磯に上陸して、霊龜二年（七一六）武蔵国高麗郡に封ぜられるまで大磯に居住していたと言われる。但し、大磯と高句麗との関連を実証する史料は、今のところ見当たらない。しかし、いまでも神奈川県中郡大磯町高麗には、高麗山・高麗寺・高麗神社（現在は高来神社と呼ばれる）などの名が残っており、昔高句麗系渡来人たちの定着によって、開拓された地方であることは間違いないと思われる。いずれにせよ、若光の一団が武蔵国高麗郡に移し住む以前に、相模国の大磯に上陸して居住していたと見られる。その後、若光は高麗郡の首長に任せられ、大磯を去り武蔵国に移ったので、国の人々は王の徳を慕って高麗山の山麓に祠を造って高麗王の霊を祀ったと伝えられている。なお、高句麗系の氏族の中で最も名高いのは高麗福信である。この高麗福信については『続日本紀』桓武天皇延暦八年（七八九）十月の条に詳しく記されている。

散位従三位高倉朝臣福信薨しぬ。福信は武蔵国高麗郡の人なり。本の姓は肖奈。その祖福徳、唐将李勣、平壤城を抜くに属して、国家に来歸きて、武蔵の国の人と為りき。福信は即ち福徳が孫なり。小年くして伯父肖奈公行文に随ひて都に入りき。(中略)聖武皇帝甚だ恩幸を加へたまふ。勝宝の初、従四位紫微少弼に至る。本の姓を改めて高麗朝臣と賜ひ、信部大輔に遷さる。神護元年、従三位を授けられ、造宮卿を拜し、兼て武蔵・近江の守を曆たり。宝龜十年、書を上りて言さく、「臣聖化に投してより年歳已に深し。但し、新しき姓の榮、朝臣は分に過ぐと雖も、旧俗の号、高麗は未だ除かれず。伏して乞はくは、高麗を改めて高倉とせむことを」とまうせり。詔して許したまひき。天応元年、彈正尹に遷され、武蔵守を兼ねたり。延暦四年、表を上りて身を乞ひ、散位を以て第に歸りき。薨しぬる時、年八十一。

福信は武蔵国高麗郡に生まれて、少年の頃伯父の肖奈公行文に従つて入京し、聖武天皇の引き立てで出世した人物であるといわれている。しかも彼の祖父たる福徳は、平壤城が落ちてから直ちに大和朝廷に帰化すると

もにその地武蔵国を求めて居住したようである。また、天平十九年(七七七)六月の条に福信は一族八人とともに肖奈公から「肖奈王」という王姓を賜っている。その後、天平勝宝二年(七五〇)正月、福信は一族六人とともに高麗朝臣と賜姓される。そして、宝龜十年(七七九)三月、自ら望んで旧俗の高麗の号を高倉に変えることを求めて許され、改めて高倉朝臣を賜り、桓武天皇の延暦八年に八一歳で没している。

福信は延暦八年に八一歳で死亡したとすれば、元明天皇の和銅二年(七〇九)に武蔵国高麗郡で生まれたことになる。しかし、この高麗郡が設けられたのは靈龜二年(七一六)となり、高麗若光の王姓を賜った大宝三年(七〇三)との中間に当たるので、甚だ疑問である。これに対し、鳥居龍藏氏は「福徳の武蔵野に居住した時は靈龜二年より前のことで、而か伯父等のあるのから考えると、多少の一族其の他を伴つて此処に移つて来て居たらしく思はれる」と述べておられる。とすると、この高麗福信の一族は、高麗王若光よりも先に武蔵国にきて住み着いた高句麗系渡来人でなくてはならないが、それはのちに彼が高麗から高倉と改姓することになったことから窺われる。すなわち、高麗福信らの一族は高句麗滅

亡後、日本に亡命して武蔵国高麗郡に定着していたが、大和に入京して中央政界に進出して出世し、聖武帝以後の六朝にわたって、春宮亮・信部大輔・造・宮卿・武蔵守・近江守・但馬守となる等、早くから帰化して改姓し、貴族に列せられたものと考えられる。在日作家金達寿氏は、この高麗福信というのは、その出生名から、高麗王若光から出たものと考えられ、「聖天院にある高麗王若光の墓と称するもの、じつはこの福信の墓ではないか」と推定しておられる。果たして、先着の福信らの一族は若光らと同一家族であったか否かはさて置いて、天平十九年に肖奈公福信らにも「肖奈王」という称号が賜姓されたことは、少なくとも高句麗王族の子孫と見做されたためであって、大宝三年高麗若光の王姓を賜ったことと深い関係があるのではないかと思われる。

このように、東国地方における高句麗系渡来人を中心に定着と変遷の過程の一部を、古代日本史を通じて検討してみたわけであるが、彼らは同地社会において新しい大陸文化をもたらし、先住民と相互に調和融合しながら日本人化し、その地域の歴史と文化を築き上げたのである。

二 高麗神社と高麗家

旧高麗郡高麗村は元来武蔵国の一部で、明治二九年（一八九五）に入間郡に合併されるまで、高麗郡は続いたが、市町村の合併によって高麗の地名は消え、現在は埼玉県日高市新堀となっている。そこに高句麗系渡来人たちによって建てられた「高麗神社」がある。祭神は高麗王若光を主神とし、天孫が降臨する時に道を案内したという猿田彦命、そして伝説上の人物である神功皇后が新羅を征伐するために出発する時、靈魂の媒介者的役割をした武内宿禰命のほか六柱をも配祀する。高麗神社の祭神となっている高麗王若光は、高麗明神・大宮明神、あるいは白鬚明神・出世明神ともいわれている。この高麗神社の宮司職は、今も高麗若光の子孫である高麗家によって代々受け継がれている。

元正天皇靈龜二年（七二六）、東国各地に散在していた高句麗系の渡来人一七九人を集めて武蔵国に高麗郡を設置し移住せしめた時、彼らの首長に任命されたのは若光である。聖武天皇天平二〇年（七四八）高麗王若光が死去すると、郡民たちは若光の生前住居の裏山に靈廟

を建て、これを高麗明神と崇めた。また、高麗王若光は晩年その白髭を垂れたので白髭様と親しみ尊んだといわれる。

そして、高麗家には家宝の一つとなっている『高麗氏系図』（韓国でいう『族譜』に該当する）という系譜が伝わっている。この『高麗氏系図』は、巻頭の一行のみ虫食いのため欠くが、現在は原本と副本があり、各々縦七寸、長さ五尺五寸に及ぶ卷子本である。さらに、同系図には高麗家の各歴世を載せ、かつ若干の来歴などを注記している。すなわち、それらの記事によって第五九代目の高麗澄雄氏に至るまで、高麗郷・高麗神社・高麗家の変遷と沿革を概ね知り得る点で、非常に貴重な史料である。この系図は、明治十九年（一八八六）当時内閣修史局編修副長官を務めていた歴史学者重野成斎氏が官命を受けて、関東六県の古文書を探訪した際に、高麗家に所蔵されている系図を発見し、その史料的价值を高く評価したという。それをきっかけに高麗家と高麗神社は史学界でたいへん注目され、多くの学者・在日同胞がこの神社を訪れるようになった。以後、日本と韓国との通交が始まると、韓国側からも注目を浴びるようになる。戦前はこの神社を参拝するのは、政治家・学者・文学者

など特定の人々であったが、戦後は一般市民、特に在日韓国人・朝鮮人たちが多く訪れるようになる。

なお、この『高麗氏系図』を見ると、第二八代永純の注記には同系図が世に伝わるようになったその経緯について、次のように詳しく記されている。

正元元年十一月八日大風時節出火系図□高麗持来宝物多焼失。因之一族老臣高□□新井本所新神田中山福泉吉川丘登□□大野加藤芝木等始高麗百苗相集諸家故記録取調系図記置也。然不詳処有之以来代々無違失書次可致者也。

鎌倉中期の正元元年（一二五九）十一月八日の出火のため、高句麗から将来してきた宝物類と共に『高麗氏系図』も焼失してしまったので、高麗一門より出た各氏族の代表者が集まって、宗家の系図を再編修することになった。その時、『高麗氏系図』を再編修するために集まった氏族は、高麗氏のほか「高麗井、駒井、新井、井上、本所、新、神田、中山、福泉、吉川、丘登、大野、加藤、芝木」の各氏等である。武蔵国に高麗郡が置かれたのは、靈龜二年（七一六）であるから、それから五四三年が経っ

ていた時点で、高麗宗家よりこれだけの氏族がわかれ出ているのである。

つまり、現在高麗氏に蔵せられる『高麗氏系図』の原本というのは、十三世紀中頃に高麗氏をはじめ、各氏族が集まって記し直されたものとなる。この『高麗氏系図』の原本は第四五代良賢の死後、賢光の代（高麗家第四六代）に至り、「故あって親戚、入間郡勝呂郷なる勝呂氏に預けられて、其儘十代を経過したが、明治に至り、井上寂蔭、加藤小太郎二氏が勝呂美胤に返却を進められたので、美胤は之を高麗大記に返した」という経緯が知られる。

また、第二三代麗純は初め純秀と名乗ったが、康治二年（一一四三）に園城寺行尊の勧めにより修験道に入門し、大峰修行をして修験者（山伏）となり、名を麗純と改めた。この時より高麗家は園城寺本山派修験として武州入間・多摩・高麗三郡の年行事職の大先達を勤める篠井観音堂に属し、明治初期の神仏分離まで別当大宮寺と号するようになった。現在、高麗神社で祀っている大宮大明神（または高麗大明神）も、神仏習合が行われ、本地仏は十一面観音または聖観音とされ、本山派修験の別当大宮寺が祭司を司っていたといわれる。すなわち、第

二三代麗純が修験者となってから、高麗家は大宮大明神の別当大宮寺住職を世襲し、以後、明治元年（一八六八）までの約七百年間、大宮大明神の祭祀は、別当大宮寺によって修験道の儀礼に基づいて行われたという。

そして、同系図には第二七代豊純の時、深い子細があつて、これまですべて高句麗から従いきた親族重臣とのみ縁組してきた伝統を破り、はじめて駿河の岩木僧都道暁の娘を室として迎え入れたことに注意すべきであろう。

高麗家は、これまで周囲の高句麗人の子孫たちに支えられ、高句麗の王族の血統を守り続けてきたが、当時の戦国時代という乱世に高麗家を保ち続けるためには、やむを得ず同族以外の人といわゆる「政略結婚」をしたものと見られる。この婚姻をきっかけに高麗家は幕府の源家と縁を結び、根篠の幕紋を用いるようになり、同家の人々は関東武士として活躍するのである。さらに、第四四代良道の時、後北条氏が滅び、天正十八年（一五九〇）徳川家康が関東に入ると、祝賀の言葉を述べるため江戸城に参上し、家康から三石の寄進を受けたと伝えられている。

その後、明治元年三月に明治政府によって神仏分離令が出され、仏事祭式を一切禁止した。その神仏分離令を

受けて、同年九月二七日に第五代高麗大記は、復飾改名願いを出して大宮寺と分離し、高麗神社の祠掌(宮司)に任命された。現在の高麗神社は明治維新の時、このように大きく変化したが、その後も日本の朝鮮植民地政策によって、その姿を変えて今日に至っている。

三 聖天院勝楽寺

日高市新堀の高麗神社から南西方向の五〇〇メートルほどの場所に「聖天院」という寺院がある。この聖天院の正式な名称は高麗山勝楽寺で、開山より六百年間法相宗の道場であったと伝えられるが、室町時代前期に真言密教の道場となり、今は真言宗智山派に属している。寺伝及び『高麗氏系図』の巻頭に、

天平勝宝三辛卯。僧勝楽寂。弘仁與其弟子聖雲同。納遺骨。一字草創。云勝楽寺。聖雲若光三子也。

と記され、高麗王若光とともに高句麗からやってきた侍念僧の勝楽は、若光の死去後その菩提を弔うため、若光の菩提寺建立を計画したが、途中の天平勝宝三年(七五

一)に示寂した。そこで、若光の三男で勝楽の弟子聖雲は、若光の孫である弘仁とともに、勝楽の意思を継いで寺を創建し、高麗王若光が守護仏として高句麗より将来した聖天尊(歓喜天)を祀ったことにより聖天院勝楽寺と称するようになった。これが、現在の高麗山聖天院勝楽寺の起源である。恐らく、この地は高麗氏一族にとつて精神的聖地であったに違いない。

現在は山門右側一〇メートルほどに有名な「高麗王廟」があり、その中に高麗王若光の墓という五層の石塔があり、鎌倉時代に建立されたものと推定されている。この高麗王若光の墓は、先述した高麗福信の墓ではないかという説もあるが、やはり筆者は天智五年(六六六)十月、高句麗の使節として来日し、やがて母国が滅亡すると、ついに帰国せず、高句麗系渡来人一七九九名の統率者として、武蔵国高麗郡の首長に任せられた高麗王若光の墓であることは、ほぼ間違いないと思う。江戸時代に編纂された『新編武蔵風土記稿』は、当時の聖天院の姿を、次のように詳しく記している(引用文中の句読点、濁点は筆者による)。

高麗山勝楽寺ト号ス。真義真言宗、山城国醍醐松橋無

量寿院末ナリ、天正十九年寺領十五石ノ御朱印ヲ賜フ。當時古ハ大寺ナリシイヘド、寛永年間回祿ノ災ニカ、リテ、什宝古籍コトゴトク烏有トナリテ、草創ノ事實年代総テシルベキモノナシ。但シ今寺宝トスル文応二年鐘銘ニ、当寺号ヲ載セタレバ古キ起立ナルコトシルベシ。中興開レ僧秀海示寂ノ年月詳ナラズ、此僧ノ時ヨリ無量寿院ノ末トナリ、今ニ至テ四十一世相承スト云、本尊不動ヲ安ズ、コノ腹内ニ安ズル不動ハ立像ニシテ、長二寸五分、弘法大師ノ策ナリ云、門末スベテ五十四ヶ寺アリ、古ハ寺地今ノ門前畑ノアタリニアリシヲ、寛永ノ頃今ノ地ニ移シヨシ、本堂ノ内ニ高麗山ト云扁額ヲカケリ。

この記事から、当時聖天院は高麗山勝樂寺と称し、天正十九年（一五九一）江戸幕府から寺領十五石の朱印状を賜わったことが分かる。安藤優一郎氏²⁶によると、天正十八年徳川家康は江戸に入り、旧来有力な諸寺社に対して領地安堵・寄進を大々的に行ったが、特に翌年十九年十一月付けの朱印状は大量に発給されたと述べておられる。すなわち、この時に聖天院勝樂寺も、家康から朱印高十五石の朱印状の発給を受けたことを意味する。この

聖天院は、江戸時代より高麗郡一帯の本寺として、天正十八年、寺領十五石、末寺はもと五十四寺を擁し、たいへん隆盛したが、寛永年間の火事のため衰え始めた。その後も、明治維新による神仏分離・廃仏毀釈・寺請制度の廃止などで、聖天院は多難な時代を迎えるのである。その経緯について、山本修康氏は『高麗聖天院』²⁷において、次のように説明されている。

明治に入り、聖天院は、神仏分離令による廃仏毀釈の嵐に遭い、寺運が衰え荒廃した。そこで、この名刹行方を憂えた真義真言宗管長の松平実因は、明治二〇年に権中僧正伊佐弁盈に寺の復興を命じた。ここに、第四七世弁盈の尽力によって寺運は再び興隆し、第五〇世弁明住職の今日に至っているのである。

この文章から読みとれるのは、明治に入り、神仏分離政策によって聖天院が衰えると、明治二〇年（一八八七）真義真言宗側は由緒ある名刹の荒廃を憂え、聖天院勝樂寺の第四七世弁盈に寺の復興を命じ、弁盈の尽力により寺が興隆するようになった経緯が窺われる。

なお、この聖天院の山門に入ってみると、山門と呼ば

れる仁王門は、仁王像ではなく、右が風神で左が雷神である。これは東京にある浅草寺の雷門に倣って、天保三年（一八三二）に六年の歳月を費やして完成したという瓦葺きの総檜造りで、重厚な建造物である。筆者は一九九六年五月、はじめて高麗神社を訪問した折りに聖天院も見学したが、その時は、山門を通過して長い石段を登ったところに、寛永年間に再建したという聖天院の本堂があった。ところが、二〇〇六年六月に再び聖天院を訪れた時は、元々の本堂の裏山の中腹に、平成十二年（二〇〇〇）十一月に完成したという新しい本堂が建てられていた。境内は静寂で眺望もよく、ここからは旧高麗郷のほとんど全域が俯瞰し得られる。

また、新本堂の西側に隣接する場所に、平成十二年に完成した「在日韓民族無縁仏慰霊塔」がある。この聖天院の山腹にある慰霊塔は、「第二次大戦で不幸な歴史の中で亡くなられた沢山の無縁の同胞達に、昔渡来した高句麗の同胞達と供に永遠の安眠を与え供養したい」と願う、在日同胞の篤信者達の真心により建立されたという。その慰霊塔の右手に建つ八角亭は、一九一九年民族代表三三人が署名した「三・一独立宣言文」を初めて朗読したソウルのパゴダ公園内にある八角亭を縮小して建て

たものだという。さらに、広場の右手には古代朝鮮とゆかりがある人物の彫像が置かれており、日本人特有の菩提寺とは違う独特な雰囲気をも出し出している。

このように、高句麗と深く関わりがあった「聖天院勝樂寺」は、その歴史的背景から在日同胞と深いつながりを保ちながら、その姿を大きく変えていたのである。言わば、日本の寺院とは違って、聖天院の持つ特異性のため、時代が変わる度に政治・社会的影響を強く受けながら、聖天院は高麗神社と同様に日本における朝鮮渡来文化の典型として存在してきたわけである。

四 朝鮮植民地支配下の高麗神社

日本と韓国は玄海灘を挟んで向かい合っている隣国同士であり、地理的に近いということもあって、古くから人的・物的交流が盛んに行われてきた。古代国家の成立において、日本が朝鮮半島から受けた影響は極めて大きい。しかし、日本は明治維新の改革を行って先に近代化を進め、短期間の内に西欧列強に比肩するほどの近代国家を築き上げ、朝鮮を植民地支配下に置いた。高麗神社が有名になったのは、日本による強制的な「韓国併合条

約」が締結されてからである。と触れたが、それは当時の植民地統治者たちにとって、高麗神社が朝鮮民族同化政策を遂行するにあたって、極めて都合のよい存在と見做されたからである。そのために高麗神社が政治的に利用され、その過程で齊藤実・南次郎・小磯国昭^②など、当時の朝鮮総督が相次いで参拝し、植民地時代に朝鮮統治に関わった多くの人々が高麗神社を訪れるようになる。

現在も高麗神社の境内には、植民地支配の残影というべき遺造物がかなり残っているので、それについて言及しておきたい。まず、埼玉県道から高麗神社へ入る入口の一の鳥居手前には、ここから高麗神社であることを知らせる約五メートル程の石柱が立っている。この石柱の前面には、大きく「高麗神社」と書かれた文字が彫られており、向かって右の側面には「朝鮮総督 陸軍大将 南次郎」、左の側面には「昭和十四年建之」という文字が彫られている。この南次郎とは、一九三六年（昭和十一）八月から一九四二年（昭和十七）五月まで、朝鮮総督府第七代総督であり、朝鮮における皇民化政策を推進した。一九三七年に日中戦争が始まると、朝鮮人を戦争に動員するために「内鮮一体」をスローガンに掲げ同化政策を施行し、朝鮮人の志願兵制度・創氏改名などを導

入した人物である。さらに参道を進むと、二の大鳥居を通過して三メートルほど行くと石灯籠が左右に一基ずつある。そして、社殿に向かつて左側の灯籠の後面には「朝鮮総督府関係高等官一同」とあり、右側の灯籠の後面には「昭和十五年建之」という文字が彫られ、当時朝鮮総督府に勤める高級官僚らが高麗神社参拝し、献灯したことが知られる。

また、参道の途中に社殿に向かつて左側に二本の杉の木が植えられている。その二本の杉の木の前にその献木を示す木製の杭が立っている。その社殿の前面にはそれぞれ「李王垠殿下御手植」「李王妃方子女王殿下御手植」とあり、後面にはそれぞれ「昭和十一年十一月二十一日」と書いてある。この「李王垠殿下」とは、高宗皇帝の三男で朝鮮王朝最後の皇太子であった李垠（一八九七〜一九七〇）であり、「李王妃方子女王殿下」は、皇太子李垠と一九二〇年四月二八日に結婚した梨本宮方子（一九〇一〜一九八九）のことである。さらに、参道を進むと狛犬が左右に一基ずつあり、左右の狛犬の後面にはそれぞれ「朝鮮総督府 中樞院参議一同 昭和十六年六月」と文字が彫られている。朝鮮総督府中樞院とは、一九一〇年九月三十日付に施行された「朝鮮総督府中樞院官制」

(勅令第三五五号)によって設置したという。この中樞院参議とは、親日派に与えた唯一の官職であり、金允植・李完用・朴齋純・趙重應等が任命されている。

そして、社殿に登って行く石段手前に二メートルほどの石灯籠が左右に一基ずつある。この左右の石灯籠には左右同じく、灯籠本体の前には「献灯」、灯籠本体の後面には「十四年十月」とあり、台座の後面には「高麗神社奉賛会理事一同」という文字が彫られている。この「高麗神社奉賛会」というのは、高麗神社及び高麗王遺跡を顕彰し、社殿の改修、境内の拡張を目的として、一九三四年に当時の政治家兪玉秀雄氏を中心に設立され、同会の会則には高麗神社の奉賛に関する宗旨が当然含まれている。しかし、同会が設立当年に編纂・発行した『高麗神社の由来と奉賛会の趣旨』という小冊子の中で、「高麗神社を内鮮一体の活きた模型であり、活きた証拠である」と記されていることを考えれば、「内鮮一体」の方にポイントが置かれていたのは、明らかである。さらに、石段を登って入る社殿入口の神門の上にある扁額の中心には右から「高句麗神社」と書かれた文字の左横に縦書きで「朝鮮人 正二品趙重應 謹書」と小さい文字で書かれている。この趙重應(一八六〇〜一九一

九)は、名高い親日派であり、一八九八年金弘集内閣が崩壊されると、日本に亡命して一九〇六年に帰国し、李完用内閣で法務大臣・農商工部大臣を歴任した。また、一九一〇年八月「韓国併合条約」の締結に賛成した「売国七逆臣」の中の一人である。『高麗神社と高麗郷』によれば、趙重應は明治三十三年(一九〇〇)七月十七日に高麗神社を訪問し、当時第五七代興丸氏と出会って感激の涙を流し、「今昔之感不覺為之墜涙。謹以書呈于高麗興丸氏」とあり、この時に「高句麗神社」という扁額を書いて、興丸氏に謹呈したと推定される。

このように、朝鮮植民地支配下における高麗神社は、その境内に建てられている建造物だけを見ても、日本による朝鮮植民地同化政策の影響を強く受けている部分が多いことは否めない。それは、『高麗神社と高麗郷』の序文で中山久四郎氏が高麗神社を歴史的背景から内戦融和のモデルとしてみているように、当時植民地統治者たちは、朝鮮民族同化政策を目的に高麗神社を「内戦融和」「内鮮一体」の好例として、政治的に利用したのである。

おわりに

以上、日本の中に朝鮮渡来文化の遺跡として残っている高麗神社と聖天院をめぐって、日韓両国の歴史的背景を踏まえながら、高句麗系渡来人たちを中心に考察してみた。六六八年高句麗の滅亡と共に朝鮮半島から数多くの高句麗人が日本に渡ってきた。大和政権は高句麗からの亡命者たちを日本各地に分散し配置していたが、律令体制が整備される七世紀以後になると、彼らを一地域に居住せしめる必要があった。そして、『続日本紀』の靈龜二年（七一六）に東国の「駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野」という七国に散在して居住していた高句麗人一七九九名を武蔵国に移した。そこに新たに高麗郡を設置して未開拓地の開発のために、彼らの先進的な技術を利用したのであり、かくて居住規定なども設けられたのである。

武蔵国に高麗郡が設けられた時、その首長に任せられ郡を治めたのが高麗王若光であった。若光は今の高麗神社の付近に居を構えて荒野を開拓して行き、武蔵国の開発に力を注いだ。天平二〇年（七四八）高麗王若光が死

去すると、高麗郡民たちは彼の生前の徳を偲んで高麗山の山麓に靈廟を建て、高麗明神・白髭明神として崇めて祀ったのが高麗神社の起源である。若光の死後その菩提を弔うために、勝樂の弟子聖雲と弘仁によって菩提寺として建立されたのが聖天院である。高麗王若光を祭神とする高麗神社は、その子孫である高麗家が代々官司を勤め、今は第六〇代目に及んでいる。現在高麗神社は、埼玉県・東京都だけで約百三十ヶ所の分社があり、その中には広瀬神社ひろせ或いは白髭神社しろひげになっているところもあるという。

なお、日本による朝鮮植民地支配の時代に入ると、植民地統治者たちは、高麗神社を朝鮮民族が日本に同化した好例として見做し、政治的に利用したことも事実である。それは、高麗神社の境内に存在している建造物を見ても日本による朝鮮民族同化政策のために、当社が政治的に利用されていたことを物語っている。

近年は高麗神社を訪れる参拝客も年々増えており、日韓友好のシンボルとして両国のマスコミにもしばしば登場する。さらに、高麗神社は開運の神として崇敬を集め、特に政治家の中にも、浜口雄幸・若槻礼次郎・斎藤実・鳩山一郎など、当社参拝後総理大臣に就任した人が多かつ

たことから「出世明神」とも呼ばれている。また、この神社は日韓両国の歴史教育の生きた教材として利用されており、最近はサムルノリなどが在日韓国人・朝鮮人の民俗行事も度々行われている。

《注》

- (1) ここでは「高句麗」を指し、「こうらい」と呼ぶ場合は後世の「高麗国」をいう。『日本書紀』『続日本紀』は、いずれも「高句麗」を意味するものは、すべて「高麗」の二字で記す。
- (2) 新日本古典文学大系『日本書紀』下(岩波書店、平成五、三五四頁参照)。
- (3) 新日本古典文学大系『続日本紀』巻一(巻一〜巻五、岩波書店、平成元〜平成十七)、六九頁。以下引用する『続日本紀』の本文はすべてこの書による。なお、「王」の字に「コキシ」或は「コニキシ」という仮名を附したのは、古代朝鮮語の音訳で、王または貴人・高官を意味する。
- (4) 上田正昭『東アジアと海上の道』(上田正昭著作集第五巻、角川書店、平成十一)、二九〜三二頁参照。なお、古代の朝鮮半島からの移住民をすべて「帰化人」と呼んでいたが、上田正昭氏と金達寿氏らの度重なる問題提起によって、現在ほとんど「渡来人」という用語に変わっているのである。
- (5) 注(3)前掲書巻二、一五頁。
- (6) 注(3)前掲書巻三、二八三頁・三五一頁。
- (7) 今井啓一「湘南大磯高麗寺・高麗神社をめぐって」(『藝林』十七・六、昭和三五・十二)。
- (8) 注(3)前掲書巻五、四四五〜四四七頁参照。
- (9) 金達寿氏は、福信が高麗から高倉に改姓したのは、いわゆる帰化系ということがすぐ知れるそれをきらって高倉としたのではなく、「高麗」というよりも「高倉」のほうがはるかに彼の祖国であった高句麗に近かったはずである」とされ、高倉は「コウクラ」でもなく、コクリまたはコクルを指す意味であると指摘しておられる。『日本の朝鮮文化』1(講談社、昭和四五)、六五〜六六頁。
- (10) 鳥居龍蔵「武蔵野の高麗人(高句麗)」(『武蔵野』一・三、大正七・一二)。
- (11) 注(9)前掲書、六五頁。
- (12) 九世紀はじめに成立して諸氏の系譜を記している『新選姓氏録』巻之十八、「高麗」の部を見ると、「高麗朝臣、高句麗王、好台七世孫、延興王之後也」という記事がある。この「好台王」は「広開大王」の別称で、高麗朝臣福信は広開大王以後七代目に当たる「延興王」の子孫であったことから推測すれば、福信と若光は系統が違わず王族であったかも知れない。『新選姓氏録』(神道大系古典編、昭和五六)、六八四〜六八五頁。
- (13) 中島利一郎氏によると、この「白髭」はクナラ・クナラ(大國)という朝鮮語からきたもので、この白髭は

- 朝鮮語では *White Hair* (白髭) であると考えられ、「大宮即ちクナラは白髭のクナラと同訓であるところから、白髭明神の名もおこったのであろう」とされ、「而してこのクナラ(クダラ)百濟、高句麗の本義と共に大國の意であるので、ここに帰化族としての彼らの自尊心も大いに含まれてゐた」と指摘しておられる。『日本地名学研究』(日本地名学研究所、昭和三四)、一〇九、一一二頁参照。
- (14) 高麗神社の由緒書である『高麗神社と高麗郷』の中に「里人の口碑に『高麗王は其髭髪白かりき、故に高麗明神を一に白髭明神と称へ奉る』と言ひ伝へてある」と記されている。高麗明津編『高麗神社と高麗郷』(高麗神社務所、昭和六)、七、八頁。
- (15) 金光林「高麗神社からみた朝鮮渡来文化」『比較文学研究』六四(平成五・一一)。
- (16) 注(14)前掲書、二七頁。
- (17) 注(14)前掲書、一一、一三頁。当時、内閣修史副長官を勤めた重野成斎氏は『高麗氏系図』の副本を作って内閣編修局に納めたが、現在は東京大学史料編纂所に移管して保管中である。
- (18) 江戸時代に編纂された『新編武蔵風土記稿』の「高麗郡」の条に、「別当大宮寺ハ高麗王の子孫ニテ世々社司タリシニ延久四年園城寺行尊回國ノ頃社司右京進力止宿シ折二因テ修驗ノ道ニ入テ麗純ト改ム」とあり、麗純は延久四年(一〇七二)園城寺行尊の勧めにより、修驗道に入ったとするが、『高麗氏系図』に麗純は正治元年(一一九九)三月八二歳で死亡しているから、生まれは
- 永久五年(一一一七)となり、麗純が行尊の勧めにより、修驗道に入門したとみるのは間違ひであろう。『新編武蔵風土記稿』六(歴史図書社、昭和四四)、八五五頁。
- (19) 『日高文化財編』(埼玉県日高市刊行、平成元)、二二一、二二六頁参照。
- (20) 安藤優一郎「代替り朱印改の実態と諸問題——武蔵國高麗郡高麗神社を事例として——」『史学雑誌』一〇八、一一、平成十一・一二)。
- (21) 注(14)前掲書、二五頁。
- (22) 注(18)前掲書、八五六、八五七頁参照。
- (23) 注(20)安藤氏前掲論文。
- (24) 山本修康『高麗聖天院』(さきたま出版会、平成十二)、一一頁。
- (25) 聖天院にある慰靈塔の案内文より抜粋(平成十八年六月十八日、筆者が聖天院を訪問した際に確認)。
- (26) 古代朝鮮の建国の始祖、檀君王儉をはじめ、広開土大王・太宗武烈王・王仁博士・鄭夢周・申師任堂などの偉人達の石像が配置されている。
- (27) 『高麗神社と高麗郷』の中には「高麗神社参拝者諸名士芳名」が載せられており、政治家・学者・文学者のほか、朝鮮植民地時代の時、親日派たちの名前も見える。四〇、四二頁参照。
- (28) 朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史 新版』(三省堂、平成七)、二九〇頁。
- (29) 渡辺みどり『日韓皇室秘話李方子』に詳しい(読売新聞社、平成一〇)。

(30) 注(15)金光林氏前掲論文。

(31) 『韓国民族文化大百科辞典』(韓国精神文化研究院、平成三)、六一―八頁。

(32) 注(14)前掲書、一八―一九頁。

(33) 『高麗神社と高麗郷』の冒頭にある中山久四郎氏の「序文」には、「武蔵国の高麗郡及び新羅郡、甲斐の巨魔郡、摂津の百濟郡、その他諸国に於て朝鮮古代の国名を以て、都邑の名、山川の名、原野の名となすもの少からざることを思へば、内鮮の歴史的關係、及び内鮮融和共栄の上より見て、一種無限の思慕感慨の念の油然而として起るを禁ずること能はざるなり」と記され、朝鮮民族同化のために高麗神社を「内鮮融和」のモデルとして位置づけようとする意図が如実に窺えるのである。

(34) 鳥居氏は、武蔵国では高麗郡以外にも高句麗系渡来人の移住が行われていたとされ、その一例として粕江郷(現在の東京都粕江市)と、その付近にある深大寺の古仏も彼らに関係すると述べておられる。注(10)鳥居氏前掲論文参照。

(35) しかし、金達寿氏は「白髭神社」は新羅大明神ということ、高麗(高句麗)神社の分社に白髭神社があるのに対し、「高麗神社が高麗郡にできる先、そこに新羅系のもものたちが祭っていた白髭神社があって、それが退転したあとに、高麗神社がかぶさった」と推定しておられる。「日本の中の高句麗文化」(『古代の高句麗と日本』所収、学生社、昭和六三)、二二三―二四頁参照。